

「バスの運転手さんはどこを見ていますか？」

みなさんこんにちは。夏見台幼稚園・保育園園主の鳥居徹也と申します。このニュースレターは夏見台幼稚園・保育園をご検討のみなさまと在園児保護者のみなさまにお送りしています。よろしくどうぞ。

〒273-0866
船橋市夏見台 2-16-1
夏見台幼稚園・保育園
園主 鳥居徹也



1. ある小学校の授業から

小学校の授業の話です。

2年生の子どもたちに、「バスの運転手の仕事」について教えることになりました。さて、どんな言葉をかけるといいのでしょうか？

その1 「バスの運転手さんはどんなお仕事をしていますでしょうか？」

これは誰もが考え付く表現でしょう。さらにもう少し工夫するなら、

その2 「バスの運転手さんはどんなことに気をつけて運転しているでしょうか？」

しかし授業の達人と呼ばれる先生は、次のような言葉を投げかけます。

その3 「バスの運転手さんはどこを見て運転していますか？」

これは筑波大学附属小学校などで教鞭をとり、多くの教師に「教え方」の指導してきた、有田

和正氏の授業です。質問の表現に「見る・聞く・感じる」などの知覚動詞を入れることで、子どもの想像力を刺激する手法です(『社会科「バスの運転手」』有田和正著、明治図書より)。

「その3」が一番イキイキと授業に熱中します。それは子ども自身が「運転手の目」になってしま

うからです。あたかも自分が運転手になったかのように考えるからです。

こうした発問の表現の工夫。これも大切な教育の役割です。

その3

「バスの運転手さんはどこを見て運転していますか？」



実際に「運転手の目」になってしまう知覚動詞で想像力が具体的になる

2. 教育の2つの役割



こんな話を聞いたことがあります。

教師の役割とは「月を指差す」こと。そこまで。実際に月を見るのは生徒自身。そして「自分の目」で見た月についてどう感じるか、何を考えるかは生徒の問題となる、と。

生徒に意欲や好奇心があれば(またその教師への敬意なども含めて)、生徒は自ら多くを学ぶでしょう。

ということで私が考える教育の大きな役割は以下の2つ。

1. 子どもの意欲を育む 2. 子どもに視点を与える

まず①「意欲」について。

指差す教師がいても、そもそも見る意欲がなければムダに終わります。だからまずは、子どもが本来持っている好奇心や意欲を上手に花開かせることです。

続いて②「視点」について。

よく「体験が大事」といわれます。自分自身が実際にやっていることならば、自分の目で直接見ていることになります。しかし直接体験からしか学べないとなれば、それもまた1つの制約です。何でもかんでも体験できません。

だから「想像力」が必要になります。「ことばの力」で、**自分の目**を対象に飛ばす。でもどのように見ていいかわからないので、その視点を限定してあげる。教師はその表現方法を工夫するわけです。冒頭で紹介した質問の表現もその1つです。

一方の子ども側にも、自ら視点を得ようという本能があります。それが「模倣」です。幼児には「自己中心性」があり、自分を基準に世界を解釈しています。その上で「模倣」により相手の動きを観察し、記憶し、順序どおりに再現しようとします。

つまり「自己中心性」をうまく使い、相手の立場になってしまうわけです。相手の中に視点を置くことになります。その延長に、「人に共感する力」が育まれていくのではないのでしょうか。「ごっこ遊び」は本当に大事です。



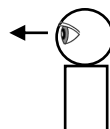
ということで、今回のニュースレターは幼児教育の先の「話」になります。「視点」にまつわるあれこれです。

3. 視点を変えると…

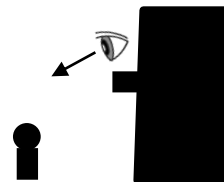
そのものずばり、『視点』（宮崎清孝、上野直樹著、東京大学出版）という本に、様々な話が紹介されています。

エーブルソンという人が行ったものですが、話を聞きながら記憶を再生させる実験です。主人公がホテルを出て町を散歩する話を聞かせます。そのとき、次のような注意をします。

①主人公の視点で
聞いてください



②4階からの視点で
聞いてください



20分後に、記憶している内容を再現してもらいました。

「①主人公の視点で」話を聞いた人たちは、身体感覚と近景をよく想起したといいます。一方「②ホテル4階からの視点で」話を聞いた人たちは、近景と遠景を想起しました。つまり、

**視点の違いが、
理解の違いに影響した**

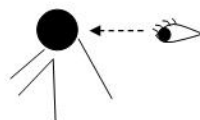
ことになります。

さらに、視点の違いは物事の理解だけでなく、心情の理解にも影響します。こんな実験です。

傍観者

①

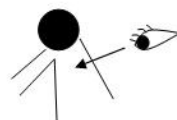
モデルの
ようすは
どうか？



観察者

②

モデルは
どう感じて
いるか？



当事者

③

もし自分が
同じ目に
あったら？



ストットランドという人が行ったものですが、視点の与え方によって、相手への共感度が変わるという実験です。手を熱するモデルの様子を見てもらいながら、観察する人の発汗量を測定します。その際、次の3つの方法で見てもらいます。

①は傍観者的視点です。「モデルの様子はどうか？」と聞きます。ちょっと離れた感じ。

②は少し近寄って観察者的視点です。「モデルはどう感じているか？」と心情を聞きます。

③は当事者的視点です。「もし自分が同じ目にあったら？」と聞きます。

すると予想通り、③の当事者的視点のときに生理的指標に変化が見られたといいます。つまり相手の気持ちを直接知ろうとするよりも、その人の状況に「なりきって」自分のものとしてイメージする方が強い共感が起こり、体調にも影響を与えると。つまり、

**対象との距離感により
相手への共感度は変わる！**

わけです。

4.「視点の移動」あれこれ…

「想像力」はとても大切な力といわれます。私はこれをもっと具体的に表現したいのです。つまり自分の「目」を、相手（さらに人間以外のモノにまで）に飛ばす能力ではないかと。

勉強、ビジネス、スポーツ、芸事、そしてもちろん人間関係。「視点の移動」という切り口でみると、面白い発見があります。

プロ野球の投手が、相手打者の弱点を知るために、その打者のフォームをまねて研究していたという話。これも視点の移動です。

サザエさんの「波平」の声は、声優の永井一郎さんが演じています。この永井さんの著書『朗読のススメ』（新潮文庫）に、面白いことが書いてありました。

声優とは声だけで勝負します。想像の中で、相手になりきらねばなりません。永井さんは、一生懸命練習している若い声優に、次のようにアドバイスしています。



**「足に何を履いているの？
あなた、景色を見ているだけでしょ？
実際にその場に居なくちゃ！」**

**距離感＝共感度
なりきる**

お医者さんも面白いことを書いています。精神科医の神田橋條治さんは、カウンセリングの際、患者の姿勢、ことば遣い、アクセント、呼吸までまねるといいます。面と向かってできないときは、頭の中のイメージでまねるそうです。すると治療のヒントが浮かんでくるらしいです。「患者の視点」に立つわけです。

歌舞伎の修行の本に、内弟子と外弟子の違いに触れたところがありました。外弟子はどうしても内弟子には勝てない。なぜなら、稽古の時間だけでなく、生活のすべてを師匠と共にする内弟子は、師匠になりきり、形だけでなくその呼吸（息づかい）までまねていくからだといっています。「師匠の視点」ですね。

よく、職人の修行の話で、いつまでたってもなかなか技術を教えてくれないという話があります。それは、生活空間を共有することで、技術の奥にある師匠の呼吸や心持ちをまねろ、というメッセージなのかもしれません。「親方の視

点」ですね。

また芸事には、「視点の移動」を促すさまざまな「わざ言語」があるといえます（『ことばと身体』尼ヶ崎彬著、頸草書房）。たとえば、声楽指導における「目玉のウラから声を出しなさい」。踊りの師匠の言う「指先を目玉にしなさい」。すると動きが激変するといえます。

最後に作家の想像力。古代中国の歴史小説を書いている作家の宮城谷昌光さんは、なんと、あの膨大な司馬遷の『史記』を丸写ししたといえます。「手」で思考していたのでしょうか。すると行間からイマジネーションがわいてくるそうです。司馬遷の魂に触れていたのかもしれませんが。

ただ漫然と模倣するのではなく、相手になりきる。そのための「目」という生々しい身体感覚の移動についてまとめてみました。

「視点の移動」あれこれ

【打者の視点】プロの投手が相手打者のフォームをまねる

【患者の視点】カウンセリングで患者の姿勢・言葉遣い・呼吸までまねる

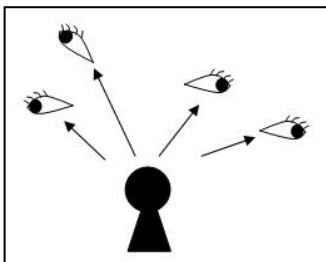
【作家の視点】文章をなぞる

【師匠の視点】歌舞伎の修行、内弟子と外弟子のちがい

【親方の視点】職人の修行、なかなか技術を教えてくれない（呼吸をまねろ！）

4. 視点を与えたその先は？

自分の視点を自由自在に移動できると便利だと思います。相手の気持ちの理解・共感。人間



関係にも、勉強にも、ビジネスにも役立つことでしょう。

ただ先にも書きましたが、そこから何を想像するかは本人次第

です。

また自分の「立ち位置」の問題もあります。いろいろな方面に想像力が広がっても、自らのアイデンティティが固まらないと、その視点はさまよい続けます。だからまずは、心をしっかり育むことですね。

最後にチャップリンの言葉です。

ロングショットで撮ると喜劇 クローズアップでは悲劇



チャップリン



バナナで滑った人を、カメラを引いて遠景で撮ります（ロングショット）。すると喜劇になる。しかし同じシーンを、カメラを顔に近づけてクローズアップで撮るとどうなるか。涙を流した悲しげな顔や悔しそうな表情があらわになり悲劇になる。

これも「視点の移動」の問題です。物の味方で心が変わるのです。

コロナだ、戦争だ、不景気だ、と暗い話題が多い昨今。気分が落ち込むときは視野が固定されて狭くなります。そんなときはこのチャップリンの言葉を思い出して、視点の移動を試みてはどうでしょうか。

カメラを遠く引いて、大きな視点で物事を眺めてみる。すると悲劇も喜劇に変わりうるのです。（終）

※郵送停止希望の方はご連絡ください。